






PASSIVE IMMUNIZATION FOR MAMMALS USING BIRD OR OX ANTIBODY AND COMPOSITION THEREFOR

Patent number: JP60248628
Publication date: 1985-12-09
Inventor: STOLLE RALPH J (US); BECK LEE R (US)
Applicant: STOLLE RES & DEV (US)
Classification:
- **international:** A61K39/395; A61K39/40; C12Q1/00; G01N33/531
- **european:**
Application number: JP19850022742 19850207
Priority number(s): US19840577804 19840207; US19840622130 19840619

Also published as:

 EP0152270 (A2)
 US4748018 (A1)
 JP8231427 (A)
 JP8231426 (A)
 JP8231425 (A)

more >>

Abstract not available for JP60248628

Abstract of corresponding document: **US4748018**

A method of passively immunizing a mammal against a condition caused by an antigen comprising: administering to the mammal immunizing amounts of an antibody obtained from a domesticated fowl which has been immunized against the antigen; the mammal being tolerant to the antibody by virtue of having a history of consumption of antibody containing material derived from the egg of a fowl.

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 特 許 公 報 (B 2)

(11) 特許番号

第2548115号

(45) 発行日 平成 8 年 (1996) 10 月 30 日

(24) 登録日 平成 8 年 (1996) 8 月 8 日

(51) IntCl. ⁶	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 K 39/395			A 6 1 K 39/395	A
A 2 3 L 1/305			A 2 3 L 1/305	

発明の数 1 (全 13 頁)

(21) 出願番号	特願昭60-22742	(73) 特許権者	999999999 ストール、リサーチ、エンド、デイベロ ブメント、コーポレーション アメリカ合衆国オハイオ州、シンシナ チ、コーネル、ロード、6954
(22) 出願日	昭和60年(1985) 2 月 7 日	(72) 発明者	ラルフ、ジエー、ストール アメリカ合衆国オハイオ州、オレゴニ ア、ノース、ウエイズビル、ロード、 2099
(65) 公開番号	特開昭60-248628	(72) 発明者	リー、アール、ベツク アメリカ合衆国アラバマ州、バーミンガ ム、ダンモア、ブレイス、2550
(43) 公開日	昭和60年(1985) 12 月 9 日	(74) 代理人	弁理士 佐藤 一雄 (外 2 名)
(31) 優先権主張番号	5 7 7 8 0 4	審査官	瀬下 浩一
(32) 優先日	1984年 2 月 7 日	(56) 参考文献	特開 昭54-130995 (J P, A) 特開 昭58-65223 (J P, A)
(33) 優先権主張国	米国 (U S)		
(31) 優先権主張番号	6 2 2 1 3 0		
(32) 優先日	1984年 6 月 19 日		
(33) 優先権主張国	米国 (U S)		

(54) 【発明の名称】 トリの抗体を用いた哺乳動物の受動免疫化

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 家禽の卵に由来する高められた力価の抗体を含んでなる食物であって、その高められた力価が、哺乳動物による該食物の繰返し摂取で抗体に対する耐性を誘発するのに充分なものである、免疫治療に有用な食物。

【請求項 2】 上記抗体が、哺乳動物内にある種の状態 (a condition) を引き起こしうる少なくとも一つの抗原に対応し、該抗原に対して上記家禽が免疫化されている、請求項 1 に記載の食物。

【請求項 3】 食物が、上記抗体を含有する卵を含むものあるいはその卵である、請求項 1 あるいは 2 に記載の食物。

【請求項 4】 含有された抗体に対して充分な水準の耐性を誘発するのに有用である、請求項 1 ~ 3 のいずれかに

記載の食物。

【請求項 5】 抗体が、下記の抗原類の一つまたはそれ以上に対応する、請求項 1 ~ 4 のいずれかに記載の食物。
シュードモナス・アエルギノサ (Pseudomonas aeruginosa)、シュードモナス・マルトフィア (Pseudomonas maltophilia)、ストレプトコッカス・エキシミリ (Streptococcus equisimili)、ストレプトコッカス・ディスガラクティエ (Streptococcus dysgalactiae)、ストレプトコッカス・ウベリス (Streptococcus uberis)、ストレプトコッカス・ボビス (Streptococcus bovis)、パストウレラ・ムルトシダ (Pasteurella multocida)、パストウレラ・ヘモリチカ (Pasteurella haemolytica)、モラクセラ・ボビス (Moraxella bovis)、アクチノバチルス・リグニエレス (Actinobacillus lignieres)、コリネバクテリウム・レナーレ (Corynebacte

rium renale)、フソバクテリウム・ネクロホルム (*Fusobacterium necrophorum*)、バチルス・セレウス (*Bacillus cereus*)、サルモネラ・ダブリン (*Salmonella dublin*)、サルモネラ・ハイデルベルグ (*Salmonella heidelberg*)、サルモネラ・パラティフィ (*Salmonella paratyphi*)、エルシニア・エンテロコリチカ (*Yersinia enterocolitica*)、スタフィロコッカス・アウレウス (*Staphylococcus aureus*)、スタフィロコッカス・エピデルミディス (*Staphylococcus epidermidis*)、ストレプトコッカス・ピロゲネス (*Streptococcus pyrogenes*)、アエロバクター・アエロゲネス (*Aerobacter aerogenes*)、エシエリキア・コリー (*Escherichia coli*)、サルモネラ・エンテリティディス (*Salmonella enteritidis*)、クレブシエラ・ニューモニエ (*Klebsiella pneumoniae*)、サルモネラ・ティフィムリウム (*Salmonella typhimurium*)、ヘモフィルス・インフルエンザエ (*Haemophilus influenzae*)、ストレプトコッカス・ビリダンス (*Streptococcus viridans*)、プロテウス・ブルガリス (*Proteus vulgaris*)、シゲラ・ディセンテリアエ (*Shigella dysenteriae*)、ストレプトコッカス・B群 (*Streptococcus Group B*)、ディプロコッカス・ニューモニアエ (*Diplococcus pneumoniae*)、ストレプトコッカス・ミュタンス (*Streptococcus mutans*)、コリネバクテリウム (*Corynebacterium*)、アクネタイプ1および3 (*Acne, Types 1 and 3*)、ネisseria・ゴノリ (*Neisseria gonorrhoeae*)、ミコバクテリウム・チューバキュロシス (*Mycobacterium tuberculosis*)、ヘモフィルス・バギナリス (*Haemophilus vaginalis*)、b群ストレプトコッカス・エコリ (*Group b Streptococcus coli*)、ミクロプラズマ・ホミニス (*Mycoplasma hominis*)、ヘモフィルス・デュクレイ (*Haemophilus ducreyi*)、グラヌローマ・イングイナレ (*Granuloma inguinale*)、リンフォパチア・ベネルム (*Lymphopathia venereum*)、トレポネマ・パリダム (*Treponema pallidum*)、ブルセラ・アボルツス (*Brucella abortus*)、ブルセラ・メリテンシス (*Brucella melitensis*)、ブルセラ・スイス (*Brucella suis*)、ブルセラ・カニス (*Brucella canis*)、カンピロラクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス・インテスティナリス (*Campylobacter fetus intestinalis*)、レプトスピラ・ポモナ (*Leptospira pomona*)、リステリア・モノシトゲネス (*Listeria monocytogenes*)、ブルセラ・オビス (*Brucella ovis*)、クラミジア・プシッタチ (*Chlamydia psittaci*)、アクチノバチルス・エクーリ (*Actinobacillus equuli*)、サルモネラ・アボルタス・オビス (*Salmonella abortus ovis*)、サルモネラ・アボルタス・エクイ (*Salmonella abortus equi*)、コリネバクテリウム・エクイ (*Corynebacterium equi*)、コリネバクテリウム・ピオゲネス (*Corynebacterium pyogenes*)、アクチノバチルス・セミニス (*Actinobacillus seminis*)、ミコプラズマ・ボビゲニタリウム (*Mycoplasma bovis*)、クロストリジウム・テタニ (*Clostridium tetani*)。

【請求項6】上記抗体が、IgG、IgMあるいはIgAである、請求項1～5のいずれかに記載の食物。

【発明の詳細な説明】

【発明の背景】

【発明の分野】

本発明は、免疫化された家禽種から得られた異種抗体による哺乳動物の受動免疫化に関する。

【背景技術の説明】

IgA、IgMおよびIgGなどの各種抗体タイプよりなる血清グロブリン画分を使用して対応する抗原に対抗し、それによって抗原の有害な影響を中和することができる、免疫学の分野の当業者によく知られている。各種抗原としては、発癌性、細菌性およびウイルス性の種、植物および動物起源の生体制御因子、毒素（トキシン）および毒物などが含まれる。

通常、動物の免疫系は、外来抗原に曝されると、抗原の生体制御のおよび（または）有害な影響を中和する。ある哺乳動物の免疫系の外来抗原への暴露は、自然に生ずることがあり、また、ワクチンの形態での抗原の意図的な投与により宿主を抗原に曝することもできる。動物は、抗原性物質をワクチン投与すると、対象動物が抗体を産生する免疫応答が生ずる。この過程は、一般的に、抗原に曝された宿主種の能動免疫化と称される。能動免疫化により任意の動物種から産生される抗体は、その動物種に対する同種（ホモログス）の抗体である。

一つの種の産生された抗体を用いて他の種における対応抗原の影響を中和しうることはよく知られている。一つの種からの個体が、他の個体において産生された抗体から免疫保護を受け取る時に受動免疫化が生ずる。この過程は、供与体から受領体への抗体の移動を必要とする。供与体と受領体とが同一種（スペシース）である場合には、抗体は同種（ホモログス）である。他方、供与体と受領体が異種である場合には、抗体は異種（ヘテロログス）であるといわれる。

受動免疫化は、病気の予防および治療のための有効な方法を提供するものであることが知られているが、ヒトの医学における受動免疫化の使用には制約がある。同種のヒト抗体配合物が、一般的に利用可能でないからである。他方、異種抗体類の使用は危険であるので、供与体動物種において産生された異種抗体によるヒトの受動免疫化は、緊急の状況においてのみ使用される。ヒトの治療において異種抗体が用いられる状況の具体例としては、ウマにおいて産生されるヘビ毒およびハチ毒の抗血清の使用などが挙げられる。これらの抗体は、ヘビおよびハチの毒素を中和し、それによりその有害な影響を除去および減少させる。

rynebacterium pyogenes)、アクチノバチルス・セミニス (*Actinobacillus seminis*)、ミコプラズマ・ボビゲニタリウム (*Mycoplasma bovis*)、クロストリジウム・テタニ (*Clostridium tetani*)。

【請求項6】上記抗体が、IgG、IgMあるいはIgAである、請求項1～5のいずれかに記載の食物。

【発明の詳細な説明】

【発明の背景】

【発明の分野】

本発明は、免疫化された家禽種から得られた異種抗体による哺乳動物の受動免疫化に関する。

【背景技術の説明】

IgA、IgMおよびIgGなどの各種抗体タイプよりなる血清グロブリン画分を使用して対応する抗原に対抗し、それによって抗原の有害な影響を中和することができる、免疫学の分野の当業者によく知られている。各種抗原としては、発癌性、細菌性およびウイルス性の種、植物および動物起源の生体制御因子、毒素（トキシン）および毒物などが含まれる。

通常、動物の免疫系は、外来抗原に曝されると、抗原の生体制御のおよび（または）有害な影響を中和する。ある哺乳動物の免疫系の外来抗原への暴露は、自然に生ずることがあり、また、ワクチンの形態での抗原の意図的な投与により宿主を抗原に曝することもできる。動物は、抗原性物質をワクチン投与すると、対象動物が抗体を産生する免疫応答が生ずる。この過程は、一般的に、抗原に曝された宿主種の能動免疫化と称される。能動免疫化により任意の動物種から産生される抗体は、その動物種に対する同種（ホモログス）の抗体である。

一つの種の産生された抗体を用いて他の種における対応抗原の影響を中和しうることはよく知られている。一つの種からの個体が、他の個体において産生された抗体から免疫保護を受け取る時に受動免疫化が生ずる。この過程は、供与体から受領体への抗体の移動を必要とする。供与体と受領体とが同一種（スペシース）である場合には、抗体は同種（ホモログス）である。他方、供与体と受領体が異種である場合には、抗体は異種（ヘテロログス）であるといわれる。

受動免疫化は、病気の予防および治療のための有効な方法を提供するものであることが知られているが、ヒトの医学における受動免疫化の使用には制約がある。同種のヒト抗体配合物が、一般的に利用可能でないからである。他方、異種抗体類の使用は危険であるので、供与体動物種において産生された異種抗体によるヒトの受動免疫化は、緊急の状況においてのみ使用される。ヒトの治療において異種抗体が用いられる状況の具体例としては、ウマにおいて産生されるヘビ毒およびハチ毒の抗血清の使用などが挙げられる。これらの抗体は、ヘビおよびハチの毒素を中和し、それによりその有害な影響を除去および減少させる。

異種抗体によるヒトの受動免疫化は、非ヒト起源の抗体がヒトの免疫系に対して外来のものであるので安全でない。受領者の免疫系を外来供与者の抗体蛋白質へ暴露することは、受領者中に外来抗原に対する免疫反応を生じさせる。この免疫応答は、アナフィラキシーショックおよび死に到ることのある血清の病気を引き起こす。

従って、異種抗体は、知られていて、しかも有益な用途があるにも拘らず、この治療方法は安全の考慮から一般的には使用されていない。

ニワトリ、シチメンチョウおよびアヒルなどの家畜種が、トリの病気を引き起こす因子並びに他の抗原に対する抗体を血液および卵中に産出することは公知である。例えば、ルバックーフエルハイデンら (Immunology, 27, 683 (1974)) およびネッスル, G. A. ら (J. Med., 130, 1337 (1967)) は、ニワトリの免疫グロブリンを定量的に分析している。ポルソンら (Immunological Communications, 9, 495-514 (1980)) は、幾つかの蛋白質および蛋白質の自然混合物に対して雌トリを免疫化させ、卵の黄身中にIgY抗体を検出している。ファーテルら (Biochemical and Biophysical Research Communications, 102, 1028-1033 (1981)) は、雌トリをプロスタグランジン類に対して免疫化させ、卵黄中に抗体を検出した。ジェンセニウスら (Journal of Immunological Methods, 46, 363-68 (1981)) は免疫診断用に卵黄IgGを単離する方法を示している。ポルソンらのImmunological Communications, 9, 475-493 (1980) には、各種植物ウイルスで免疫化された雌トリの卵黄から単離された抗体が記録されている。

しかしながら、これら文献の全ては、各種抗原に対して産生された家禽の免疫グロブリンの研究にのみ関するものであるが、これらの抗原は、その全てが必ずしも哺乳動物の病気あるいは病態に特異的に影響を及ぼすあるいは引き起こすものではない。前記のポルソン (両論文1980) あるいは上記ジェンセニウスの論文は、診断方法における手段として、哺乳動物の抗体の代りにトリの抗体の使用を示唆している。ポルソンはImmunological Communications, 475-493 (1980) の491頁において、新たに孵化したニワトリをそれらの母トリが曝されなかった病気に対して受動的保護を与える可能性があることを示唆している。すなわち、この病気に対して超免疫化された雌トリから得られた卵黄IgYをヒヨコに注射することによる方法である。この示唆は、推論的であることに加えて、仮に異なった個体であっても、同一種から得られた抗体による一つの種の同種の受動免疫化のみを取扱うにすぎない。

上記ジェンセニウスのJournal of Immunological Methods, 46, 67頁には「多量のきちんと包括された抗体を与えることにより、腸内蛋白質分解酵素による抗体の劣化を最小にする手段が採られるならば、適当な免疫化されたニワトリからの卵が、何等かの腸内感染症の有用かつ

無害の治療となると推論することも可能である」と述べられている。これらの著者は、キャンベルらの研究 (Journal of Immune Milk, 1, 3 (1964)) の研究を引用して、免疫化された動物からの乳により感染症を治療する考えとの類似性を示している。このジェンセニウスらの示唆は、自ら認めるように、推論である。更に、抗体が、腸内蛋白質分解酵素により劣化するであろうという警告も伴っている。

英国特許2057451号明細書には、卵の卵黄の分離により行なった、雌ニワトリ類の免疫化が開示されている。得られた免疫学の製剤は、診断の目的に、あるいは、適切な場合には病気の治療の目的に、使用することができる。ヒトに対する使用も示唆されているが、異種抗体の使用に関連する通常の問題が起きないであろうと推測する理由はない。

トリと哺乳類とは、系統発生上は離れているので、ニワトリおよびその他の家禽を哺乳動物の病気あるいは病態に対する抗体を産生するものとして選択することは非論理的であった。哺乳動物類の治療に意図された免疫治療生成物に対する抗体の明らかな選択は、密接な生態発生的関連性を有する他の哺乳動物であった。例えば、ニワトリの蛋白質はヒトの免疫系に対して外来性であるので、ヒトの患者を非経口投与配合剤により投与されるニワトリの抗体で治療することは論理的ではなく、また繰返し使用によりアレルギー反応を引き起こすであろう。事実、鳥の卵に由来する抗体を哺乳動物における病態を予防あるいは治療するのに使用したという何等の証拠も科学文献にはない。

〔発明の概要〕

本発明は、血清病あるいはアナフィラキシーショックを避ける条件下に異種の低抗原性蛋白質配合物を投与する方法を提供するものである。本発明は、また、血清病あるいはアナフィラキシーショックを避ける条件下において免疫化された家禽の血清および（または）食用生成物から得られた異種の低抗原性IgG配合物を投与する方法を提供するものである。

なお、以下において「ウシ科動物」に言及した場合は、それは、トリの代わりにではなく、トリに加えてウシ科動物を使用してもよいという態様を示すものである。

本発明は、従って、抗原により引き起こされた状態に対して哺乳動物を異種受動免疫化する方法に関するものである。この方法は、抗原に対して免疫化された家禽から得られた免疫学的有効量の抗体を哺乳動物に投与することからなるものである。ここで、哺乳動物は、その家禽の卵から得られた物質を食物源として消費する履歴を有するところから抗体に対して耐性を有するものである。

本発明は、1984年2月7日米国特許商標庁に「受動免疫化用異種蛋白質抗体配合物」に対してベックおよびス

ツールにより出願された米国特許出願第577,804号に開示および特許請求されている発明の更なる発展に関するものである。この米国特許出願の開示内容は、ここで準用するものとする。

米国特許出願第577,804号においては、哺乳動物の受動免疫化方法が特許請求されているが、この方法は、ある抗原性物質に対して免疫化されたウシ科動物の乳から得られた精製した抗体を非経口的に注射することよりなるものである。ここで、該哺乳動物は、そのような家畜化されたウシ科動物の乳の消費の履歴を有するものである。この米国特許出願には、哺乳動物の受動免疫化方法も開示されている。その方法は、ある抗原性物質に対して免疫化された家禽の卵から得られた精製した異種抗体を非経口的に注射することよりなる。そこで、哺乳動物は、そのような家禽の卵を消費する履歴を有するものである。

本発明は、卵抗体の投与が非経口的のみならず、如何なる適当な経路であっても良い点において、米国特許出願第577,804号に開示される概念を包含し、かつ拡張するものである。

更に一つの態様において、本発明は、また、ある抗原により引き起こされた状態に対して哺乳動物を異種受動免疫化する方法に関する。この方法は、下記 a および b) からなるものである。

a) その哺乳動物に、その抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られたその抗原に対する高められた抗体力価を有する物質を、哺乳動物がその抗体に対して十分な耐性を生ずるまで与える。

b) その哺乳動物に、その抗原に対して免疫化された家禽から得られた免疫学的有効量の抗体を投与する。

このように、この実施態様においては、家禽から得られた抗体を哺乳動物に投与する前に哺乳動物には抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られた物質が与えられる。

他の一つの実施態様においては、本発明は、ある抗原に対して引き起こされた状態に対する哺乳動物の異種受動免疫化方法に関する。ここで、この方法は下記 a) および b) からなるものである。

a) その哺乳動物に、その抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳から得られたその抗原に対して高められた抗体力価を有する物質を、哺乳動物が抗体に対して相当の耐性を生ずるまで与える。

b) その哺乳動物に、非経口注射によりその抗原に対して免疫化された家畜化ウシ科動物から得られた免疫学的有効量の抗体を投与する。

また、本発明は、各種投与方法、各種条件ならびにそれらにおいて有用な各種組成物に関するものである。

例えば、好ましい実施態様において、本発明は、下記

a) および b) を含んでなる組成物に関する。

a) 所与の哺乳動物の抗原に対して免疫化された家禽の

卵から得られた抗原に対して高められた抗体力価を有する物質。

b) その抗原に対して免疫化された家畜化ウシ科動物の乳から得られた抗原に対する高められた抗体力価を有する物質。

本発明の他の一つの態様においては、下記の a) および b) を含んでなる組成物が提供される。

a) 所与の哺乳動物の抗原に対して免疫化された家禽の卵から精製された抗体。

b) その抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳から精製された抗体。

本発明は、下記 a) および b) を含んでなる組成物をも供給するものである。

a) 非経口用担体。

b) ある抗原に対して免疫化された家禽の卵から精製された抗体であって、抗体を投与した対象中に血清病あるいはアナフィラキシーショックを生じさせないもの。

更に本発明は、下記 a) および b) を含んでなる組成物を提供するものである。

a) 非経口用担体。

b) ある抗原物質に対して免疫化されたウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られる抗体であって、その抗体を投与した対象中に血清病あるいはアナフィラキシーショックを生じさせないもの。

〈好ましい実施態様の説明〉

ある動物の免疫系の外来蛋白質に応答できないということは、免疫学的耐性として知られた状態のことである。さらに、ある種の哺乳動物は、他の哺乳動物種を含む各種動物種からの抗体に対して耐性を欠くことも免疫学の分野の当業者によく知られている。従って、外来種から得られた異種抗体は、哺乳動物の治療に安全に使用することができないことが明らかである。本発明の発見は、この一般的に了解された異種免疫学の見解に対する例外である。ある哺乳動物の免疫系が、家禽の血清あるいは卵生成物中に見出される異種抗体に対して耐性となり得ることが見出された。この耐性は、異種の鳥の種からの抗体類を含有する物質を予め与えられた個々の哺乳動物に生ずるものである。異種の家禽からの抗体を含有する物質を与えられなかった個体は、引き続き投与される家禽の抗体に対して耐性を欠く。

このように、本発明の本質的特徴は、各種抗原に対して特異的に免疫化された家禽の血清あるいは卵生成物から得られる異種抗体を経口、腹腔内あるいは非経口（すなわち、静脈内あるいは筋肉内）投与などにより血清病あるいはアナフィラキシー反応を引き起こすことなく哺乳動物類に受動的に投与することができるということである。

本発明のもう一つの本質的特徴は、各種抗原に対して特異的に免疫化された家畜化ウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られた異種抗体を非経口投与により、

血清病あるいはアナフィラキシー反応を引き起こすことなく、哺乳動物に受動的に投与することができるということである。

上記のように、異種抗体の投与に必要な条件である免疫系耐性は、自然に起きるものではなく、トリの抗体を含有する物質を与えることにより哺乳動物内で時間をかけて作り上げなければならない。

如何なる哺乳動物も本発明の方法により治療することができる。これらには、ウサギ、畜牛、ウマ、ヤギ、ヒツジおよびその他の酪農において使用される種などの家畜化哺乳類の種が挙げられる。非家畜化哺乳動物、例えばサル、もまた治療することができる。最後に、本発明は、ヒトの受動異種免疫化にも適用可能である。

任意の抗原あるいは抗原の組み合わせを使用することができる。抗原は、細菌性、ウイルス性あるいは細胞性のものでも、また、家禽あるいは家畜化ウシ科動物の免疫系統が応答し、その家禽あるいはウシ科動物中に免疫感度の状態を誘発する任意のその他の物質、であり得る。これらの抗原は、哺乳動物の種に種々の状態、例えば微生物あるいはウイルスが誘発する感染症、毒性状態など、を引き起こすものが好ましい。

細菌の抗原類の適当な具体的例示として下記のものを挙げることができる。

シュードモナス・アエルギノサ (*Pseudomonas aeruginosa*)、シュードモナス・マルトフィア (*Pseudomonas maltophilia*)、ストレプトコッカス・エキシミリ (*Streptococcus equisimili*)、ストレプトコッカス・ディスガラクティエ (*Streptococcus dysgalactiae*)、ストレプトコッカス・ウベリス (*Streptococcus uberis*)、ストレプトコッカス・ボビス (*Streptococcus bovis*)、パスツウレラ・ムルトシダ (*Pasteurella multocida*)、パスツウレラ・ヘモリチカ (*Pasteurella haemolytica*)、モラクセラ・ボビス (*Moraxella bovis*)、アクチノバチルス・リグニエレス (*Actinobacillus lignieresii*)、コリネバクテリウム・レナーレ (*Corynebacterium renale*)、フソバクテリウム・ネクロホルム (*Fusobacterium necrophorum*)、バチルス・セレウス (*Bacillus cereus*)、サルモネラ・ダブリン (*Salmonella dublin*)、サルモネラ・ハイデルベルグ (*Salmonella heidelberg*)、サルモネラ・パラティフィ (*Salmonella paratyphi*)、エルシニア・エンテロコリチカ (*Yersinia enterocolitica*)、スタフィロコッカス・アウレウス (*Staphylococcus aureus*)、スタフィロコッカス・エピデルミディス (*Staphylococcus epidermidis*)、ストレプトコッカス・ピロゲネス (*Streptococcus pyogenes*)、アエロバクター・アエロゲネス (*Aerobacter aerogenes*)、エシエリキア・コーリ (*Escherichia coli*)、サルモネラ・エンテリティディス (*Salmonella enteritidis*)、クレブシエラ・ニューモニエ (*Klebsiella pneumoniae*)、サルモネラ・ティフィムリウム (*Salmonella typhimurium*)、

ヘモフィルス・インフルエンザエ (*Haemophilus influenzae*)、ストレプトコッカス・ビリダンス (*Streptococcus viridans*)、プロテウス・ブリガリス (*Proteus vulgaris*)、シゲラ・ディセンテリアエ (*Shigella dysenteriae*)、ストレプトコッカス・B群 (*Streptococcus Group B*)、ディプロコッカス・ニューモニアエ (*Diplococcus pneumoniae*)、ストレプトコッカス・ミュタンス (*Streptococcus mutans*)、コリネバクテリウム (*Corynebacterium*)、アクネタイプ1および3 (*Acne Types 1 and 3*)、ネisseria・ゴノリ (*Neisseria gonorrhoeae*)、ミコバクテリウム・チューバキュロシス (*Mycobacterium tuberculosis*)、ヘモフィルス・バギナリス (*Haemophilus vaginalis*)、b群ストレプトコッカス・エコリ (*Group b Streptococcus coli*)、ミクロプラズマ・ホミニス (*Microplasma hominis*)、ヘモフィルス・デュークレイ (*Haemophilus ducreyi*)、グラヌローマ・イングイナレ (*Granuloma inguinale*)、リンフォパチア・ベネルム (*Lymphopathia venerum*)、トレポネマ・パリダム (*Treponema pallidum*)、ブルセラ・アボルツス (*Brucella abortus*)、ブルセラ・メリテンシス (*Brucella melitensis*)、ブルセラ・スイス (*Brucella suis*)、ブルセラ・カニス (*Brucella canis*)、カンピロラクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス・インテスティナリス (*Campylobacter fetus intestinalis*)、レプトスピラ・ポモナ (*Leptospira pomona*)、リステリア・モノシトゲネス (*Listeria monocytogenes*)、ブルセラ・オビス (*Brucella ovis*)、クラミジア・プシッタチ (*Chlamydia psittaci*)、アクチノバチルス・エクーリ (*Actinobacillus equuli*)、サルモネラ・アボルタス・オビス (*Salmonella abortus ovis*)、サルモネラ・アボルタス・エクイ (*Salmonella abortus equi*)、コリネバクテリウム・エクイ (*Corynebacterium equi*)、コリネバクテリウム・ピオゲネス (*Corynebacterium pyogenes*)、アクチノバチルス・セミニス (*Actinobacillus seminis*)、ミコプラズマ・ボビゲニタリウム (*Mycoplasma bovis*)、クロストリジウム・テタニ (*Clostridium tetani*) など。

適当なウイルスの抗原の具体例としては、下記のものが挙げられる。

エキネ・ヘルペス・ウイルス (*Equine herpes virus*)、エキネ・アルテリティス・ウイルス (*Equine arteritis virus*)、IBR-IBPウイルス、BVD-MDウイルス、ヘルペス・ウイルス (*Herpes virus*) (フモニス (*humonis*) タイプ1および2)。

典型的なポリペプチド類は、受動免疫化が有用である哺乳動物に影響を及ぼす蛋白質である。それらには生体制御因子、ホルモン、酵素、ヘビ毒、ハチ毒、毒素およびその他の昆虫、および爬虫類の毒などが挙げられる。

哺乳動物内にトリあるいはウシ科動物の抗体蛋白質に対する耐性を発生させるためには、抗体に対して免疫化された家禽あるいは家畜化ウシ科動物の食用生成物から得られた抗原に対する十分な耐性誘発量の抗体力価を有する物質を哺乳動物が抗体に対する十分な耐性を有するようになるまで与える。通常、これは少なくとも、約2週間～数ヶ月の期間に基いて消費されなければならない卵物質あるいは乳を含有する餌を与えることにより達成される。比較的若い動物あるいはヒトに対して耐性の時間は、約10～14日程度の短時間であり得る。比較的年老的動物およびヒトにおいては、耐性を獲得するための最低時間は、数ヶ月になることがある。好ましい実施態様において、物質内の抗体力価は、家禽の予備免疫化によりその通常の水準を越えて高められる。

哺乳動物の免疫系の外来抗体に対する耐性は、家禽あるいはウシ科動物の精製した抗体を繰返して静脈内あるいは筋肉内に注射した際に、そのような卵あるいは乳を消費する対象内において誘発したアナフィラキシーショックの血清病がないことにより示される。耐性が生じたことの安全な表示は、トリあるいはウシ科動物の抗体の投与量を徐々に増大させることである。耐性が欠けるならば、注射の箇所に宿主内で免疫反応が伴う。これが起こる場合には、治療は中止されるべきである。投与が経口的に行われる場合には、耐性がないと胃腸の苦痛を引き起こす。

哺乳動物に与えられるトリの物質は、通常の卵あるいは所与の抗原に対して高められた力価を有するものであってもよい。その物質は、全卵、あるいはその部分、例えば殆どどのトリの抗体類が集中する傾向がある卵黄、であってもよい。更に、その物質は、その物質に存在するトリの抗体が、その免疫学的効果を失わないような条件下、より具体的にはその中のトリの抗体が変性されないような条件下、与えられるべきである。すなわち、卵が、哺乳動物の対象に与えられる場合には、蛋白質が変性された条件下にあるべきでない。

殆どどのトリの卵には、家禽に影響を及ぼす自然に発生する抗原類を有する宿主に対する抗体が含まれていること、が知られている。本発明においては、そのような卵を哺乳動物に与えて耐性を誘発することができる。他方、哺乳動物に与えられる卵中の抗体力価は、家禽の卵に通常存在する抗体の力価よりも高いものであってもよい。そのような場合に、抗体は、殆どの場合において、哺乳動物にあつては特異的であるが、トリの種には特異的ではない状態を引き起こす抗原と免疫学的に反応する性質を持つ。非免疫化家禽の卵黄に自然に存在する抗体は、哺乳類の種に病態を引き起こす抗原に対して特異性を有しない。しかし、それらは、免疫耐性を誘発するのには役立つものである。

哺乳動物に与えられるウシ科動物の物質は、通常の乳あるいは所与の抗原に対して高められた力価を有するも

のであってもよい。乳は、その物質内に存在するウシ科動物の抗体がその免疫学的効果を失っていない条件により、具体的にはその中のウシ科動物の抗体が変性していない条件下で、与えられるべきである。このように、乳が哺乳動物の対象に与えられる場合には、乳は蛋白質が変性された条件下にあるべきではない。

本発明の明細書および特許請求の範囲に用いられる「高められた力価」とは、抗原に対するトリの抗体力価が、同一抗原に対して通常のトリの抗体のバックグラウンド水準よりも少なくとも100%高いときのそのトリの抗体力価を包含することを意味するものである。

卵の源として役立つ家禽としては、ニワトリ (chickens)、シチメンチョウ、アヒル、ガチョウなどが含まれ、最も好ましいのはニワトリである。

抗体の望ましい源であるウシ科の動物としては、ウシ属が挙げられるが、最も好ましくは畜牛、ヒツジおよびヤギが挙げられるが、最も好ましいのは畜牛 (cows) である。

耐性が一度哺乳動物内に獲得されると、その哺乳動物は、所与の抗原に対する免疫反応性を有するトリまたはウシ科動物の抗体を投与する準備が整う。トリの抗体の投与は、各種経路のいずれであってもよいが、しかし、好ましくは経口投与あるいは非経口注射、例えば静脈内、腹腔内あるいは筋肉内注射、がよい。抗体の経口投与は、口および胃腸管路の病気を治療するために有効に使用することもできる。ウシ科動物の抗体による好ましい免疫化方法は、ある病態に対して有効な治療を与えるに十分な時間の筋肉内あるいは静脈内注射によるものである。抗体は、直接与えられるかあるいは通常の薬学的に許可可能な液体あるいは個体担体と組み合わされて投与される。

最も普通には、異種抗体は液体配合物として非経口注射により投与される。

卵消費の結果として対象内に予め発生した免疫耐性は、トリあるいはウシ科動物の抗体を使用する受動免疫化を安全かつ有効にする。それらの抗体は、沈殿、抽出、クロマトグラフィー、分別などの公知的手段により精製したものであるのが好ましい。「精製した」とは、実質的にトリあるいはウシ科動物起源のその他の（おそらくは免疫原性の）蛋白質あるいは非蛋白質成分がない任意のトリあるいはウシ科動物の抗体を包含するものである。そのような成分としては、例えば、抗体、細胞、細胞断片、膜断片、脂質類、核酸、細胞器官などが挙げられるが、それ等の蛋白質に限定されるものではない。

耐性発生後に哺乳動物に投与されるトリの抗体は、家禽の血清から、あるいは、それは好ましくは家禽の卵から、得ることができる。抗体は、そのまま直接に投与するか、あるいは薬学的に許容可能な液体あるいは個体の担体と組み合わせる。最も普通には、非経口注射により投与する場合には、液体配合物として投与される。抗体

は、有機マトリックス材料中でマイクロ粒状形態に調製して、次いで直接に対象に注射することもできる。

抗体の投与は、哺乳動物の所与の病態に対して免疫学的に有効である量で行われる。例えば、所与の状態、例えばヘビ、ハチあるいはその他の昆虫あるいは爬虫類に咬まれた状態、に冒された哺乳動物に対して受動的に投与するトリの抗体の量を、当業者は容易に確認することができる。このタイプの典型的な受動免疫化は、投与当り0.25mg/kg～1.00mg/kgである。治療の継続時間および強度は、治療対象の特別の条件に応じて異なる。これらの条件としては、所与の感染症、病気あるいは毒性の状態の実際の治療のみならず、う食抑制のような予防的治療も含まれる。完成の予防処置に対する典型的な投与量は、約0.25mg/kg～1.00mg/kg、好ましくは0.5mg/kg～0.75mg/kg、の範囲である。

対象に給与する卵物質を得る家禽は、（現在は耐性である）哺乳動物の対象に投与される抗体（好ましくは、精製抗体）を得るのと同じ家禽の個体であってもよく、なとくも良い。

下記の操作は、家禽あるいはウシ科動物に免疫状態をもたらすために使用される操作の一例である。

- 1) 抗原選択。
- 2) 家禽あるいはウシ科動物の第一次免疫化による感作。
- 3) 感作誘発を確認するためのその家禽の血清あるいは卵、またはそのウシ科動物の血清の試験。
- 4) 抗体産生状態を誘発し、維持するための適当な投与量のブースターの投与。
- 5) 卵黄あるいは乳中の抗体水準の試験。
- 6) 免疫化状態の際のその家禽の卵あるいはそのウシ科動物の乳の採集。

これら各工程を下記に具体的に説明する。

工程1においては、任意の抗原あるいは抗原の組み合わせを使用することができる。それらの抗原は、細菌性、ウイルス性、細胞性または鳥あるいはウシ科動物の免疫系が応答する任意のその他の物質であり得る。工程1における重要な点は、抗原が、動物内に免疫感受性の状態を誘発する能力を有しなければならないということである。抗原は、感受性を引き起こす任意の方法により投与することができる。好ましくは、多価抗原が使用される。

工程2において、免疫化の好ましい方法は、筋肉内注射である。しかしながら、静脈内注射、腹腔内注射、経口投与、直腸座薬などのその他の方法もその使用が感受性を誘発するに十分である限り使用しうる。事実、免疫化の好ましい方法は、抗原性物質を生体劣化性および生体相溶性のマトリックス物質のマイクロ粒子内に導入して、家禽あるいはウシ科動物に筋肉注射により投与する方法である。投与量は、通常 $1 \times 10^6 \sim 1 \times 10^{20}$ 細胞数、好ましくは $10^8 \sim 10^{10}$ 細胞数、最も好ましくは 2×1

0^8 細胞数、である。

工程3は、家禽あるいはウシ科動物が、抗原に対して感受性になったかどうかを決定するためのものである。免疫学の分野の当業者には、感受性の試験のための多くの方法が知られている〔「免疫学および免疫化学における方法 (Methods in Immunology and Immunochimistry)」、William, C. A., Wm Academic Press, London Vol. 1 ～ 5 (1977) 参照〕。これらの具体例としては、皮膚感受性試験、刺激性抗原に対する抗体の存在に対する血清試験および宿主から抗原に対して応答する免疫細胞の能力を評価するための試験などが挙げられる。使用される試験の種類は、使用される抗原の性質に応じて異なることが多い。好ましい方法は、多数の物質種よりなる多価ワクチンを抗原として使用し、ワクチンによる対抗前後の家禽あるいはウシ科動物の血清内の凝集抗体の存在を試験する方法である。ワクチンによる免疫化後の卵あるいは乳抗体の出現は感受性を示すものであり、この時点において工程4に進むことが可能である。感受性を誘発するのに必要な最終投与量の抗原は、使用される抗原に応じて異なる。

工程4は、抗体産生状態の誘発および維持を含むものである。家禽あるいはウシ科動物が一度感作されたことを示すと、この状態は、一定時間の間隔で適切な投与量のブースターの繰返し投与により誘発される。投与の間隔は、抗原の性質に応じて異なる。多種類の抗原に対しては、2週間のブースター間隔が最適である。ブースター投与は、免疫耐性の状態を誘発してはならない。これは家禽あるいはウシ科動物を抗体産生状態から抗体を産生することを終えてしまう状態である免疫耐性の状態に移らせてしまうからである。

また、例えば、異なった免疫化操作方法の組合せ、すなわち、一次免疫化には筋肉注射を使用し、ブースター注射等には性脈内注射を使用することも可能である。当業者により多くの異なった1) 感作および2) 抗体産生状態を誘発する免疫化方法の組み合わせを使用することが可能である。

工程5には、食用生成物中の抗体水準を決定する目的で、動物が抗体産生状態にある間に免疫化動物からの食用生成物の試料を試験することが含まれる。抗体水準は、公知のイムノアッセイおよび酵素関連技術により決定することができる。

工程6は、免疫化された動物からの卵あるいは乳の採集である。卵は、本発明の給与段階で、あるいは本発明の投与段階における精製抗体の源として、使用することができる。

投与段階において投与される抗体が、鳥あるいはウシ科動物の血清から得られる場合には、公知の単離および精製方法を利用することができる。

濾過による抗体の殺菌に引き続いて、哺乳動物の対象は、所与の病態に対して有効な治療を与えるに十分な時

間にわたって前記方法により抗体を投与する。注射部位は、注射抗体に対して腫れたりその他の免疫反応の証拠を与えるべきではない。

本発明の好ましい実施態様においては、給与および（または）投与工程が、組み合わされた物質を使用して行われる。例えば、給与は、所与の抗原（この抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られたもの）に対して高められた抗体力価を有する物質あるいは物質の組成物をその所与の抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳から得られた抗原に対して高められた抗体力価を有する物質と共に用いることにより行なうことができる（高められた抗体力価を有する免疫乳の調製については、例えば米国特許3,128,230号および米国特許3,376,198号各明細書参照）。このように、前記のような物質を含む組成物もまた本発明に含まれる。

もう一つの好ましい実施態様においては、精製抗体の組み合わせを哺乳動物に投与することができる。ここでいう組合せとは、一つの成分が投与の抗原に対して免疫化された家禽から得られた抗体であり、他の成分が所与の抗原に対して免疫化されたウシ科動物から得られた抗体であるものである。

最も好ましいのは、免疫学的に有効量の抗体類の組み合わせを含んでなるものであって、その第一の抗体が所与の抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られ、できれば十分に精製されたものであり、第二の抗体がその抗原に対して免疫化された家畜化ウシ科動物の乳から得られて、できれば十分に精製されたものである。

以上説明した組成物は、治療に利用することもでき、あるいは予備混合された食品の形態で利用することができる。一つの実施態様において、脱水された免疫乳および脱水された免疫卵物質を混合し、給餌段階において、あるいは抗体が精製されている場合には投与段階において、使用することができる。

以上、一般的な本発明の説明のあとで、以下具体例は、本発明を更に詳細に説明するものである。これらは、例示を目的としてのみ示すものであり、特に断りのない限り、本発明を何等制限するものではない。

例 1

ニワトリを免疫化させて卵中に抗体を産生するのに使用される方法は、哺乳動物を免疫化させるために使用される方法と同様であって、当業者に良く知られている。一般的操作方法は、ワクチンを注射により胸部筋肉に投与することである。好ましい方法は、1CCの塩水中の1～5mgの抗原を投与する方法である。この注射を毎週1回宛4週間繰り返した。最大抗体力価は第4回目の注射後に起こる。抗体力価は、1～2週間の間隔で抗原のブースター注射を与えることにより維持することができる。

具体例の方法によりワクチンを表 I に挙げた細菌種から調製した。

表 I

	ATCC番号
1. <i>Strep. mutans</i>	27351
2. " "	27352
3. " "	27607
4. " "	27947
5. " "	31341
6. " "	31377

1. ATCC (American Type Culture Collection) の細菌培養物を15ミリリットルの倍地で戻し、37℃で一晩インキュベートした。

2. 一旦良好な生育が得られると、ほぼ細菌の懸濁液の半量を用いて1リットルのブロス接種し、これを37℃でインキュベートした。残りの懸濁液は無菌のグリセロールチューブに移し、-20℃において6ヶ月まで貯蔵した。

3. リットル培養液中に良好な生育が見られた後に、懸濁液を14,000×で20分間遠心分離し、倍地を除去して、細菌細胞を採取した。このペレットを無菌の塩水中に再懸濁し、3回遠心分離にかけて倍地を細胞から洗浄した。3回目の塩水にスピン後にペレットを少量の2回蒸留した水に再懸濁した。

4. 倍地不含細菌の懸濁液を80℃の温水浴中のガラスフラスコ中に一晩置いて加熱殺菌した。少量の加熱殺菌した細菌をブロス培養液中に接種して生育能力を決定した。ワクチンに使用するには細菌を殺さなければならない。

5. 加熱殺菌した細菌を凍結乾燥し、無菌の小瓶中において-20℃で貯蔵した。

6. 成長した10羽の雌のニワトリを免疫化するのに混合した細菌の菌株を使用した。免疫化方法は、次の通りであった。350mgの乾燥細菌を1リットルの無菌塩水と混合して 2.2×10^8 細菌細胞/ミリリットル塩水の濃度にした（660nmにおける1.0光学密度の読み）。この混合液の1ミリリットルをニワトリの胸に2週毎に注射した。

免疫化されたニワトリから集められた卵を次の工程により加工して、卵黄から抗体を得た。

1. 卵黄を白身から分離し、黄体膜を切り開き、除去した。200ミリリットルの卵黄を測り、800ミリリットルのTris緩衝塩水（TBS）で希釈した。

TBS: Trisヒドロキシメチルアラミノメタン緩衝塩水: 0.14M NaCl, 0.01M TrisHCl, pH7.4, 0.1% NaN₃。

2. この溶液を室温においてゆっくり20分間攪拌した（全ての操作は室温で行った）。

3. この卵黄の懸濁液を14,000×において20℃で30分間遠心分離した。沈殿は廃棄した。

4. TBS中の10%デキストランサルフェート（W/V）（Sigma）の100ミリリットルを上澄液に添加し、5分間ゆっくり攪拌した。

5. 1モルCaCl₂ 250ミリリットルを添加し、溶液を30分間インキュベートして過剰のデキストランサルフェート

の沈殿を起させた。

6. 懸濁液を遠心分離し、上澄液をとっておいた。沈殿を2000ミリリットルのTBSで洗浄して、それに運ばれた蛋白質を抽出した。これらの二つの上澄液を次いで一緒に集めた。

7. これらの上澄液をイオン交換水に対して十分に透析して塩を除去して、凍結乾燥した。

免疫化前および後からの卵から得られた卵抗体を酵素結合免疫試験法を使用して細菌性のワクチンに対して反応させ、*S. ミュータンス*細菌と特異的に反応するニワトリ卵中の抗体の存在を求めた。

結果を表IIに示す。

表II		
ニワトリ 番号	免疫化前 <i>S. mutans</i> 菌株番号 1234567	免疫化後 <i>S. mutans</i> 菌株番号 1234567
1	-----	++++++
2	-----	++++++
3	-----	++++++
4	-----	++++++
5	-----	++++++
6	-----	++++++
7	-----	++++++
8	-----	++++++
9	-----	++++++
10	-----	++++++

この実験からの結果は、哺乳動物に病気を起す因子、すなわち*S. ミュータンス*に対して免疫化されたニワトリは、これらの因子に特異的に反応する抗体を含有し、また非免疫化ニワトリから得られた卵は同一の抗体に欠けることを示す。*S. ミュータンス*に対する抗体の力価は、非免疫卵からの背景力価よりも少なくとも100%大きい。

例2

表Iに挙げた細菌の菌株に対して免疫された雌ニワトリの卵の卵黄から得られたトリの抗体を、筋肉注射によりウサギに投与した。生理食塩水1ミリリットルに溶解した雌ニワトリの卵黄IgG5mgを5羽のウサギの後足に注射した。第2回目の注射を14日後に繰り返した。処置前および処置後のウサギから血液試料を集めた。ウサギ試料からの血清をOuchterlonyゲル拡散法を使用して雌ニワトリの卵黄IgGと反応させ、雌ニワトリ卵黄IgGに対するウサギの抗体の存在の試験を行った。雌ニワトリIgGに対するウサギ抗体の存在は、この処置がニワトリIgGに対するウサギ免疫系の免疫学的感作を引き起こしたこと、免疫学的証拠を与えるものであった。

この実験の結果を表IIIに示す。治療前(0週)および治療後(1、2、3週)のニワトリIgGに対するウサギ血清中の抗体の存在(+)あるいは不存在(0)を示す。

表 III				
ウサギ番号	0週目	第1週目	第2週目	第3週目
1	0	0	+	+
2	0	0	+	+
3	0	+	+	+
4	0	0	+	+
5	0	+	+	+

処置前には、5羽のウサギのいずれもが、それらの血液にニワトリIgGに対する抗体を有しなかった。処置後2週間目までには、5羽のウサギは、それらの血液にニワトリIgGに対して高い抗体力価を有した。この実験は、免疫化されたニワトリから得られたニワトリIgGによるウサギの処理がウサギの免疫化感作を引き起こすことを示している。陽性の力価を有する5羽のウサギに引き続き5mgの抗体の静脈注射による処置をしたところ、アナフィラキシー反応を引き起こし、5羽のウサギの全部が死んでしまった。

この実験は、このように、トリの種から得られた抗体が、繰り返し注射により哺乳類に投与されると、アレルギー反応を引き起こすという当今の知識を確認したものである。

この実験の次の段階は、本発明の基礎を提示するものである。上記と同一のウサギ実験を繰返した。しかしながら、この実験においては、免疫化されたニワトリの卵から得られた同一投与量の抗体の注射前に、5羽のウサギには免疫化されたニワトリから得られた1つの卵を50CCの水に溶解して30日間連続して与えた。この実験結果を表IVに示す。

処理前(0週目)および処理後(1、2、3週目)の卵IgGに対するウサギ血清中における抗体の存在(+)あるいは不存在(0)を示す。

表IV				
ウサギ番号	0週目	1週目	2週目	3週目
1	0	0	0	0
2	0	0	0	0
3	0	0	0	0
4	0	0	0	0
5	0	0	0	0

5羽のウサギのいずれもが、処置前あるいは処置後のいずれにおいてもニワトリの卵黄抗体に対してそれらの血液に抗体を有しなかった。更に、これらのウサギ中においては免疫化されたニワトリから得られたニワトリ抗体を静脈内注射により投与した場合にも、それらウサギには何等の悪い影響もなかった。これらの実験により、ウサギによる免疫雌ニワトリ卵の経口的消費が、免疫雌ニワトリIgGに対してウサギを耐性するとの結論が導かれた。

例3

本実験の目的は、トリの種の抗体による哺乳動物の治療が、実際に有用な目的に役立ち得るということを証明

することである。この証明のために、ラットを哺乳動物の種の例として選び、ニワトリをトリの種の抗体産生者の例としてとして選んだ。Beck等の米国特許4,324,782号明細書には、ラットのモデルを使用した哺乳動物起源（畜牛乳）の抗体のラットのストレプトコックス・ミュータンス（*Streptococcus mutans*）感染症を抑制する有用性が示されている。本実験の目的は、ニワトリ卵抗体が、同一の病気を治療する畜牛抗体と同一の有用性を有することを証明することである。

本実験のために、ストレプトコックス・ミュータンスの一つのセロタイプ株および三つの群からなる無菌のラット（10匹／群）を使用した。第1群には標準的な食原性食飼305号を与え、第2群には食飼305号＋免疫ニワト

リIgGを与え、第3群には305号食飼＋非免疫ニワトリIgGを与えた。この実験において、乳離れしたラット（生後20日）を実験分離器に移し、毒性のS.ミュータンスを感染させ、食飼を無制限に与えた。動物は実験から45日の年齢（全時間25日）において取り出した。実験の終了時にラットを分離器から取り出し、体重を測定した。大顎の大臼歯を除去し、無菌的に脱肉した。それらを直ちにリン酸緩衝塩水（PBS）を含有するチューブに入れ超音波処理をし、希釈し、血液中およびミチス・サリバリウス（*Mitis Salivarius*）上において二重にプレート化した（三つの異なった希釈率）。この実験の結果を表Vに示す。

群*	表				V			
	平	均	う	食	点	数*	みぞ	
	類							
群*	E	Ds	Dm	Dx	E	Ds	Dm	Dx
1*	15.8±0.8	13.2±0.9	9.0±0.8	5.8±0.6	18.8±1.1	14.4±0.7	8.6±0.5	4.2±0.6
2*	12.8±0.9	10.4±0.7	5.0±0.3	2.2±0.7	15.6±0.7	11.8±0.5	4.0±0.4	1.8±0.2
3*	15.0±1.0	11.4±0.8	7.2±0.5	4.2±0.7	16.4±0.7	12.4±0.2	4.8±0.4	2.0±0.3
4	7.8±0.7	5.8±0.8	3.1±0.5	1.2±0.5	13.4±0.5	10.4±0.4	2.8±0.4	1.2±0.6
近位								
群*	E	Ds	Dm	Dx	平均体重		S. Mutans	
1*	7.0±0.4	4.8±0.6	0.0	0.0	116±4		CFU	
2*	7.4±0.4	4.4±1.3	0.0	0.0	117±5		1.1×10 ⁷	
3*	7.4±0.6	5.2±0.6	0.0	0.0	107±5		6.2×10 ⁶	
4	4.6±0.8	2.4±0.6	0.0	0.0	106±4		8.6×10 ⁶	
							1.4×10 ⁹	

* 食飼305号中における1%試験乳全てのラットはS.ミュータンスMT 8148(セロタイプC)で感染。

a Keyesの方法により評価(Keyes, P. J. : Dental Research, vol. 37, 1077頁1958年)。

E=エナメル、Ds=僅かに象牙質、Dm=中程度に象牙質、Dx=広範囲に象牙質

S.ミュータンスに対するニワトリIgG抗体を含有する食飼は、歯科う食点数および歯垢点数（plaque scores）（CFU）のいずれにおいても減少を引き起こした。正常の雌ニワトリ卵から得られたトリ抗体（ニワトリIgG）は、う食および（または）歯垢点数に及ぼす効果が、より小さかった。この実験は、ラットモデルにおける歯科のう食および歯垢の減少に対するストレプトコックス・ミュータンスに対して免疫化されたニワトリから得られる卵の歯科のう食および歯垢の減少に対する用途を示すものである。

例4（参考）

畜牛の乳および血清から通常の生化学的方法により得られた精製IgGをミリポア濾過により殺菌した。牛乳を飲む履歴を有する3人の人に3～4ヶ月間に亘って筋肉内に5～100mgのIgGの範囲の投与量で殺菌IgG抗体を注射した。注射後注射部位のいずれも膨張その他の免疫反応の証拠の徴候を示さなかった。更に、治療された個人から採取された血清試料は血清病気の証拠を与えなかった。

例5（参考）

哺乳類に抗体耐性の状態を発生させるために、4羽のウサギに牛乳＋食物および水を90日間与えた。残りの4羽のウサギには食物および水のみを与えた。牛乳を与えた各ウサギには毎日300mlの水を与えた。全てのウサギに、実験の開始後90日間筋肉内注射により5mgの投与量の精製牛乳IgGを与えた。血液試料を各ウサギの耳静脈からウシ科のIgGの注射後1、2および3週間後に採取した。ウシ科動物のIgG抗体に対するウサギの免疫反応をOuchter lonyゲル注入技術を用いて試験したところ、ウサギを免疫化するために使用したウシ科のIgG抗原に対するウサギの血清中の抗体の反応を示した。牛乳を受け取らなかった全ての4匹のウサギから得られた血清には、ウシ科のIgGに対する抗体を示す陽性の反応が見られた。他方、牛乳を与えた4羽のウサギから得られた血清は、陰性であった。

ウシIgGに対する抗体に対する免疫学的試験（Ouchter lonyゲル注入）

第1群のウサギには、ウシ科動物のIgGで免疫化する前に90日間牛乳を与えた。

第2群のウサギには、ウシ科動物のIgGで免疫化前に

牛乳を与えなかった。

表 VI		
群番号	ウサギ	血清中に存在するウシ科動物のIgGに対する抗体
I	A	なし
	B	なし
	C	なし
	D	試験結果不確定 (ボーダーライン)
II	A	あり
	B	あり
	C	あり
	D	あり

例 6

本発明のもう一つの実施態様は、本例において明らかにされる。哺乳動物におけるトリの抗体の効果は、哺乳動物起源の抗体の同時投与により改良することができる。すなわち、例えば、畜牛の乳抗体と組み合わせて鳥類の抗体を使用すると、トリの抗体単独の使用よりも哺乳動物における感染症の治療により有効である。1リットルの免疫乳中の抗体濃度の通常の範囲は0.05~1gのIgGである。卵を1リットルを添加すると、全抗体考慮値が1~2gに増大する。

例3で説明した実験を、畜牛の乳抗体を等量のニワトリ卵抗体と組合せ、卵抗体の場合のみの場合と等価の投与量（すなわち、食餌305号+1%）の下で繰り返した。結果は、前記の表Vの第4群に示されている。

ニワトリと畜牛抗体との組み合わせは、畜牛あるいは卵抗体単独のいずれよりもより大きな影響をもたらした。

以上、本発明を十分に説明したが、ここに開示される本発明の精神あるいは範囲から離れることなく多くの変更および修正がなされ得ることは当業者に明らかであろう。

そのような変更および修正は、典型的には、本発明を下記の通りに定義することができて、その一つまたは複数を反映させたものである。

(1) 抗原に対して免疫化されている家禽から得られた免疫学的有効量の抗体を哺乳動物（ただしその哺乳動物は家禽の卵から得られた物質を含む抗体の消費の履歴を有することによりその抗体に対して耐性があるものである）に投与することからなる、抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の異種受動的免疫化方法

(A)。

(2) 投与された抗体が、IgG、IgAまたはIgM抗体である、方法(A)。

(3) 投与された抗体が、家禽の卵から得られた精製IgG抗体である、方法(A)。

(4) 受領体の哺乳動物が、10~14日から数ヶ月までに至る家禽から得られた食用生成物の毎日の消費の履歴を

有している、方法(A)。

(5) 投与が、経口のあるいは非経口の注射による、方法(A)。

(6) 抗原が、S. ミュータンス (S. mutans) である、方法(A)。

(7) 投与されている抗体が、十分に精製されており、特に抗体が、家禽の卵から得られている、方法(A)。

(8) 下記a) およびb) の工程からなる、抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の受動的免疫化方法(B)。

a) 該抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られた、抗原に対して高められた抗体力価を有する物質を、哺乳動物がその抗体に対する十分な耐性を発生するまで哺乳動物に給与する工程、および

b) 該抗原に対して免疫化された家禽から得られた抗体の免疫学的有効量を哺乳動物に投与する工程。

(9) 工程b) で、全卵を哺乳動物に給与する、方法(B)。

(10) 工程b) で、卵の卵黄を哺乳動物に給与する、方法(B)。

(11) 工程b) で、投与は注射による、方法(B)。

(12) 抗原に引き起こされた状態が「歯う蝕」である、方法(A) あるいは方法(B)。

(13) 抗原に引き起こされた状態が「歯垢」である、方法(A) あるいは方法(B)。

(14) 工程a) で、卵が、該抗原を含む多数の抗原類に対して高められた抗体力価を有している、方法(B)。

(15) 工程b) で、家禽が、工程a) で使用されたのと同じ個体である、方法(B)。

(16) 工程b) で、家禽が、工程a) で使用されたのと異なる個体である、方法(B)。

(17) 哺乳動物が、非ヒト哺乳動物、特にウサギ、ウシ科動物、馬、ヤギ、羊およびサルからなる群から選ばれた哺乳動物、である、方法(A) あるいは方法(B)。

(18) 哺乳動物が、ヒトである、方法(B)。

(19) 抗原が、細菌種、細菌種の細菌物、あるいは細菌種の組み合わせである、方法(A) あるいは方法

(B)。

(20) 抗原が、ウイルス種、ウイルス種の生成物あるいはウイルス種の組み合わせである、方法(A) あるいは方法(B)。

(21) 抗原が、生体制御物質、特にホルモン、酵素あるいは免疫制御因子、である、方法(A) あるいは方法(B)。

(22) 抗原が、ポリペプチド、特にヘビ毒液の毒素（トキシン）あるいはハチ毒液の毒素（トキシン）、である、方法(A) あるいは方法(B)。

(23) 受動的免疫化が、予防的に行われる、方法(A) あるいは方法(B)。

(24) 受動的免疫化が、病状を緩和する (palliative)

のに行われる、方法（A）あるいは方法（B）。

（25）工程 a）で、該物質を、該抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳から得られたその抗原に対して高められた抗体力価を有する物質と共に哺乳動物に給与する、および（または）工程 b）で、該物質を、該抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳からの精製された抗体と共に哺乳動物に投与する、ならびに該抗体の組み合わせを免疫学的有効量で投与、特に注射により、する、方法（B）。

（26）工程 a）および工程 b）で、家禽が、ニワトリである、方法（B）。

（27）工程 b）で、抗体が、家禽の卵から精製されている、方法（B）。

（28）下記 a）および b）からなる、抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の受動的異種免疫化に有効な組成物（C）。

a）該抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られたその抗原に対して高められた抗体力価を有する物質、および

b）該抗原に対して免疫化されたウシ科動物の乳から得られたその抗原に対して高められた抗体力価を有する物質。

（29）家禽がニワトリであり、ウシ科動物が畜牛であり、特に組成物（C）が、脱水状態の卵および乳由来の物質からなる、組成物（C）。

（30）下記 a）および b）の有効量の結合からなる、抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の受動異種免疫化に有効な組成物（D）。

a）抗原に対して免疫化された家禽の卵から得られた精製された抗体、および

b）抗原に対して免疫化されたウシ科動物から得られた精製された抗体。

（31）家禽がニワトリであり、ウシ科動物が畜牛である、組成物（D）。

（32）家禽の抗体が、その家禽の卵から精製されており、ウシ科動物の抗体が、そのウシ科動物の乳から精製されている、組成物（D）。

（33）抗原性物質に対して免疫化されているウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られて精製された異種の天然の高分子量の抗体グロブリンを該家畜化ウシ科動物からの食用生成物の消費の履歴を有する受領体であるヒトあるいは哺乳動物種に非経口的に注射することからなる、ヒト、哺乳動物種の受動的免疫化方法（E）。

（34）抗体グロブリンが、IgG、IgAあるいはIgM抗体である、方法（E）。

（35）注射される抗体が、ウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られて精製されたIgG抗体である、方法（E）。

（36）受領体のヒトあるいは哺乳動物種が、10～14日から数か月までの範囲に至る家畜化ウシ科動物からの食用

生成物を消費する履歴を有する、方法（E）。

（37）抗原性物質に対して免疫化されているウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られた異種の天然の高分子量のウシ科動物のγグロブリンIgG抗体を、食品源としてウシ科動物の乳を消費することの履歴を有している受領体のヒトあるいは哺乳動物種に非経口的に注射することからなる、異種抗体類によるヒトまたは哺乳動物種の受動的免疫化方法（F）。

（38）ウシ科動物のγグロブリンIgGが、畜牛から得られている、方法（F）。

（39）抗原性物質が、下記の群から選ばれたものである、方法（F）。

シュードモナス・アエルギノサ (*Pseudomonas aeruginosa*)、シュードモナス・マルトフィア (*Pseudomonas maltophilia*)、ストレプトコッカス・エキシミリ (*Streptococcus equisimili*)、ストレプトコッカス・ディスガラクティエ (*Streptococcus dysgalactiae*)、ストレプトコッカス・ウベリス (*Streptococcus uberis*)、ストレプトコッカス・ボビス (*Streptococcus bovis*)、パストウレラ・ムルトシダ (*Pasteurella multocida*)、パストウレラ・ヘモリチカ (*Pasteurella haemolytica*)、モラクセラ・ボビス (*Moraxella bovis*)、アクチノバチルス・リグニエリ (*Actinobacillus lignieresii*)、コリネバクテリウム・レナーレ (*Corynebacterium renale*)、フソバクテリウム・ネクロホルム (*Fusobacterium necrophorum*)、バチルス・セレウス (*Bacillus cereus*)、サルモネラ・ダブリン (*Salmonella dublin*)、サルモネラ・ハイデルベルグ (*Salmonella heidelberg*)、サルモネラ・パラティフィ (*Salmonella paratyphi*)、エルシニア・エンテロコリチカ (*Yersinia enterocolitica*)、スタフィロコッカス・アウレウス (*Staphylococcus aureus*)、スタフィロコッカス・エピデルミディス (*Staphylococcus epidermidis*)、ストレプトコッカス・ピロゲネス (*Streptococcus pyogenes*)、アエロバクター・アエロゲネス (*Aerobacter aerogenes*)、エシエリキア・コリー (*Escherichia coli*)、サルモネラ・エンテリティデイス (*Salmonella enteritidis*)、クレブシエラ・ニューモニエ (*Klebsiella pneumoniae*)、サルモネラ・ティフィムリウム (*Salmonella typhimurium*)、ヘモフィルス・インフルエンザエ (*Haemophilus influenzae*)、ストレプトコッカス・ビリダンス (*Streptococcus viridans*)、プロテウス・ブリガリス (*Proteus vulgaris*)、シゲラ・ディセンテリアエ (*Shigella dysenteriae*)、ストレプトコッカス B 群 (*Streptococcus Group B*)、ディプロコッカス・ニューモニエ (*Diplococcus pneumoniae*)、ストレプトコッカス・ミュタンス (*Streptococcus mutans*)、コリネバクテリウム (*Corynebacterium*)、アクネタイプ1および3 (*Acne Types 1 and 3*)、ネisseria・ゴノリ (*Neisseria gonorrhoeae*)、ミコバクテリウム・チ

ユバキュロシス (*Mycobacterium tuberculosis*)、ヘモフィルス・バギナリス (*Haemophilus vaginalis*)、b群ストレプトコッカス・エコリ (Group b *Streptococcus coli*)、ミクロプラズマ・ホミニス (*Mycoplasma hominis*)、ヘモフィルス・デュクレイ (*Haemophilus ducreyi*)、グラヌローマ・イングイナレ (*Granuloma inguinale*)、リンフォパチア・ベネルム (*Lymphopathia venereum*)、トレポネマ・パリダム (*Treponema pallidum*)、ブルセラ・アボルツス (*Brucella abortus*)、ブルセラ・メリテンシス (*Brucella melitensis*)、ブルセラ・スイス (*Brucella suis*)、ブルセラ・カニス (*Brucella canis*)、カンピロラクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス (*Campylobacter fetus*)、カンピロバクター・フェタス・インテスティナリス (*Campylobacter fetus intestinalis*)、レプトスピラ・ポモナ (*Leptospira pomona*)、リステリア・モノシトゲネス (*Listeria monocytogenes*)、ブルセラ・オビス (*Brucella ovis*)、クラミジア・プシッタチ (*Chlamydia psittaci*)、アクチノバチルス・エクーリ (*Actinobacillus equuli*)、サルモネラ・アボルタス・オビス (*Salmonella abortus ovis*)、サルモネラ・アボルタス・エクイ (*Salmonella abortus equi*)、コリネバクテリウム・エクイ (*Corynebacterium equi*)、コリネバクテリウム・ピオゲネス (*Corynebacterium pyogenes*)、アクチノバチルス・セミニス (*Actinobacillus seminis*)、ミコプラズマ・ボビゲニタリウム (*Mycoplasma bovis*)、クロストリジウム・テタニ (*Clostridium tetani*)、特に抗原性物質が、これらの細菌の抗原類の少なくとも二つを含む、多価ワクチン。

(40) 受領体が、ヒトである、方法 (F)。

(41) ウシ科動物のIgG抗体が、筋肉内注射あるいは静脈注射により投与される、方法 (F)。

(42) 非経口的に注射可能な賦形剤 (vehicle) 中の、抗原物質に対して免疫化されているウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られた、異種で高分子量の蛋白質抗体からなる組成物である、非経口投与用蛋白質抗体組成物 (G) (ただし、この抗体は、その抗体を投与した対象での血清病あるいはアナフィラキシーショックを生じないものである)。

(43) 抗体が、免疫化されているウシ科動物の血清あるいは乳から得られており、特にその抗体がIgG抗体である、組成物 (G)。

(44) 抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物

の受動的免疫化に対する医薬の製造のための、家畜から得られた抗体の使用 (H)。

(45) 抗体が、IgG、IgAあるいはIgM抗体である、使用 (H)。

(46) 抗体が、高度に精製されたIgG抗体である、使用 (H)。

(47) 抗原が、S. ミュータンス (*S. mutans*) である、使用 (H)。

(48) 抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の受動的免疫化に対する医薬の製造のための、家畜の卵から得られた抗体の使用 (I)。

(49) 該抗原が「歯垢」であり、家畜がニワトリであり、ウシ科動物が畜牛であり、あるいは該物質が脱水状態の卵および乳に由来のものである、使用 (H) あるいは使用 (I)。

(50) 下記 a) および b) の有効量の結合からなる、抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の異種受動的免疫化に有用な組成物 (J)。

a) 抗原に対して免疫化された家畜からの精製された抗原、および

b) 抗原に対して免疫化されたウシ科動物からプリントされた (printed) 抗体。

(51) 家畜が、ニワトリであって、ウシ科動物が畜牛である、組成物 (J)。

(52) 家畜の抗体が、その家畜の卵から精製されており、ウシ科動物の抗体が、ウシ科動物の乳から精製されている、組成物 (J)。

(53) 抗原により引き起こされた状態に対する哺乳動物の受動的免疫化に対する医薬の製造のためのウシ科動物から得られた抗体の使用 (K)。

(54) 抗体が、IgG、IgAあるいはIgM抗体である、使用 (K)。

(55) 抗体が、ウシ科動物から得られた精製されたIgG抗体である、使用 (K)。

(56) 非経口的に注射可能な賦形剤 (vehicle) 中の、抗体物質に対して免疫化されているウシ科動物の血清あるいは食用生成物から得られた、異種で高分子量の蛋白質抗体からなる組成物である非経口投与用蛋白質抗体組成物 (L) (ただし、この抗体は、その抗体を投与した対象での血清病あるいはアナフィラキシーショックを生じないものである)。

(57) 抗体が、免疫化されたウシ科動物の血清あるいは乳から得られている、組成物 (L)。

(58) 抗体が、IgG抗体である、組成物 (L)。